

# 三谷喜喜氏 推薦！

舞台の旅公演が続いた。移動はいつも新幹線だ。時間は掛かるけど、作品の構想を練るにはぴったりだし、誰にでも邪魔されずにゆっくり読書も出来る。

# 探偵小説の醍醐味を満喫

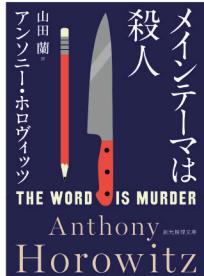
テレビドラマでもオリジナルの  
刑事案件も書いている。いつし  
か彼に、そこはかとない親近  
感を抱くようになった。年齢  
もさほど離れてはいない。ネ  
ットで写真を検索してみた  
ら、僕とは似ても似つかない  
ハンサムガイの写真が出てき  
て、ちよつとがっかりした。  
**大ベストセラー「カササギ  
殺人事件」は、上下二冊とい  
うダイナミックな分量に恐れ  
をなして未読。彼の完全オリ  
ジナルミステリーを読むのは  
この「メインテーマは殺人」**

久しぶりに探偵小説の醍醐味を味わう。謎が少しづつ解き明かされていくプロセスは、あくまでも論理的。だからこそスリーリング。タッチはエラリー・クイーンに近いような気がした。主人公はロンドン警視庁の元刑事ダニエル・ホーソーン。ホームズをさらに奇人にしたような、友達にしたくないタイプ。ぶっきらぼうで偏屈なキャラクターの裏に、どこか愛嬌も感じさせる。そしてワトソン役であ

ち合わせしているといひだ、  
ホーソーンがやって来て、ス  
ピルバーグに映画関係者かと  
質問するシーンまであるのが  
から。

んでもない目に遭うシーンは、僕自身がどんでもない目に遭っている気分になり、読んでいて恵苦しかった。それも含めて、この小説。日本で一番楽しかったのは、ひょっとして僕なのではないだろうか、とふと思つた。  
もちろん僕でない方にもお勧めです。

が絶妙だ。その後、彼はコナが初めてだ。



る物語の語り手は、なんとホ  
ロヴィツツ自身だ。

彼はドラマや映画の脚本を書きながら、その合間に事件に携わっていく。その業界裏話的なエピソードが、実際にそういった現場を知っている

僕からすれば、かなりアーノル。しかも現実のテレビドラマや俳優の名前も出てくるので、虚実ないまぜの感じが独特の世界観を作り上げている。ホロヴィッツがステイブン・スピルバーグと合本打ち合わせしているところに、ホーリーがやって来て、スピルバーグに映画関係者か質問するシーンまであるのだから。

内容はシリアルだがユーモアも忘れていない。作中のホロヴィッツが書く、自分が主人公の小説のタイトルを「ホリーブーン登場」にしてご執拗

金編通じて、あまりにも仕事っぴりが僕と似てるものだから、語り手（ホロヴィッツ）と自分が重なってしかたなかった。だから後半、彼が事件に首を突っ込み過ぎてとんでもない目に遭うシーンは、僕自身がどんでもない目に遭っている気分になり、読んでいて息苦しかった。それも含めて、この小説、日本で一番楽しかったのは、ひょっとして僕なのではないだろうか、とも思った。もちろん僕でない方にもお勧めです。

から。  
内容はシリアルズだがユーモアも忘れていない。作中のホロヴィッツが書く「自分が主人公の小説のタイトルを『ホーリー登場』」にすると、執拗に主張するホーソーン。そんな古くさいタイトルは嫌だと突っぱねるホロヴィッツ。二人のやりとりに、小説を読み出典  
「三谷幸喜のありふれた生活」  
朝日新聞  
2019年10月24日夕刊